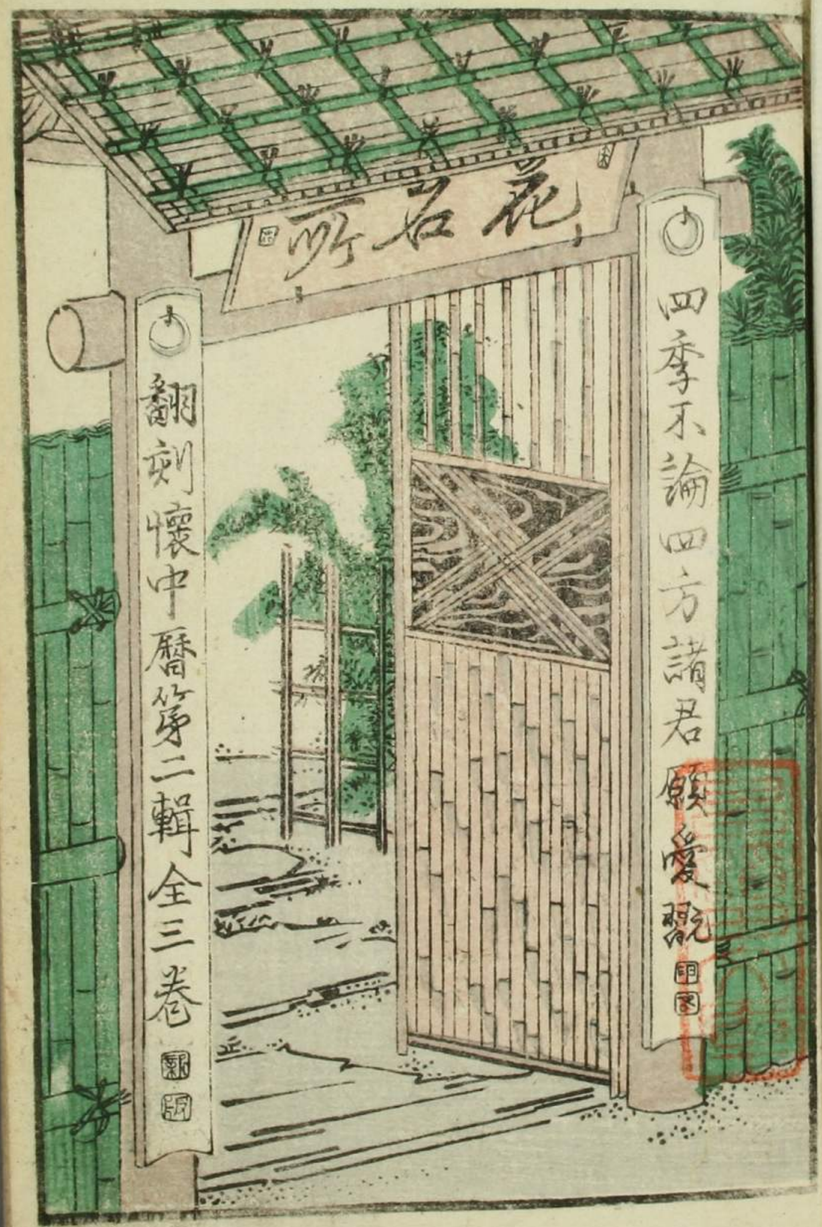
花名所懐中暦

へ13
3015
2



へ13
3015
2

花名所第二輯乃序

持る草木ハ。雨露の恵ゆゑ事。花
實をむすぶ。前ゑ著しる花名所。
糸花製本彩色ゆゑ。画工の筆
力と販元の丹誠。鉢と植木箱ゑ立派を
盡なるも。根のるまゑ形ゑ成れ。
段ゑあゝで書箱ゑ。おとりの愁も消えと。
思ひの外ゑ看官ゑ恵を請ふ梅暦。
むつきより。再度幅引の。艶を出せしもの
らん。後ゑ連ゑ二編の禍を。ゑきゑ綱ゑ。
児女達の愛顧ゑんとゑ。書林ゑ。
秘蔵せゝ花の種。大事ゑ懐中暦と

うやうゝ渡せしうど。誠をのゝぐ正是祭
禮物の魚ばらゝ菅笠あたらる花包。熨
斗を付てもおろかつゝまを。法いのちの威
光頭上ふいで弥高ぐ。蕎述の幸。たゞし
中本好の懷中ふあつて。好色乃或を開く
曆ゝ形。四季を撰ま。花名所あ。年
中重宝して。書賈の懷中ゝ温む。
木振の拙き。小枝體禾枝を。多くさし
ある造花の常形。見ゆる頑ふの。

于時天保七申乃孟陽

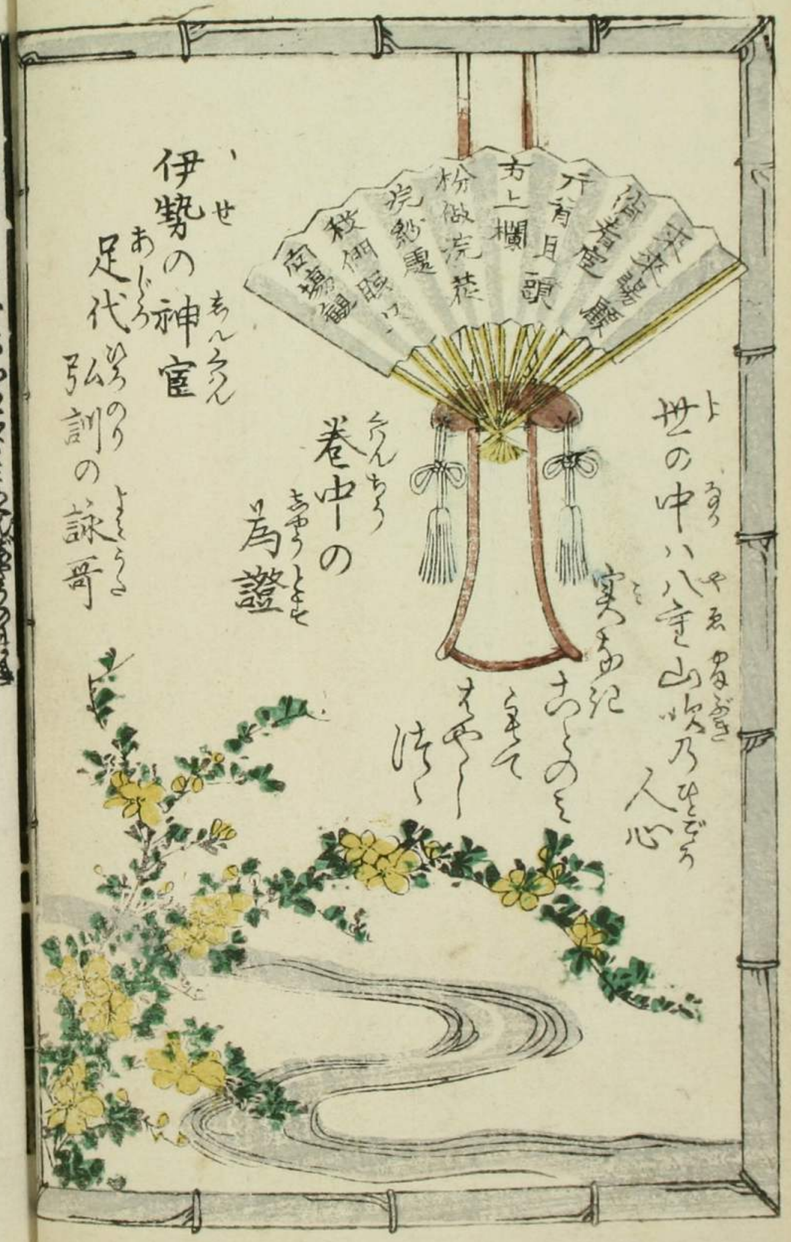
東都戯作者 金龍山人狂訓亭

為永春水誌

もへぎ
茂兵衛
若竹里

一雙玉千
千人桃
年黙朱唇
萬客掌

歌妓業枕
捉来浮
三味線弾ハ
題墨鳥
難命の列女
泥中の蘭
汚
月鼻
坊
右
清元
延津妻
花の
山



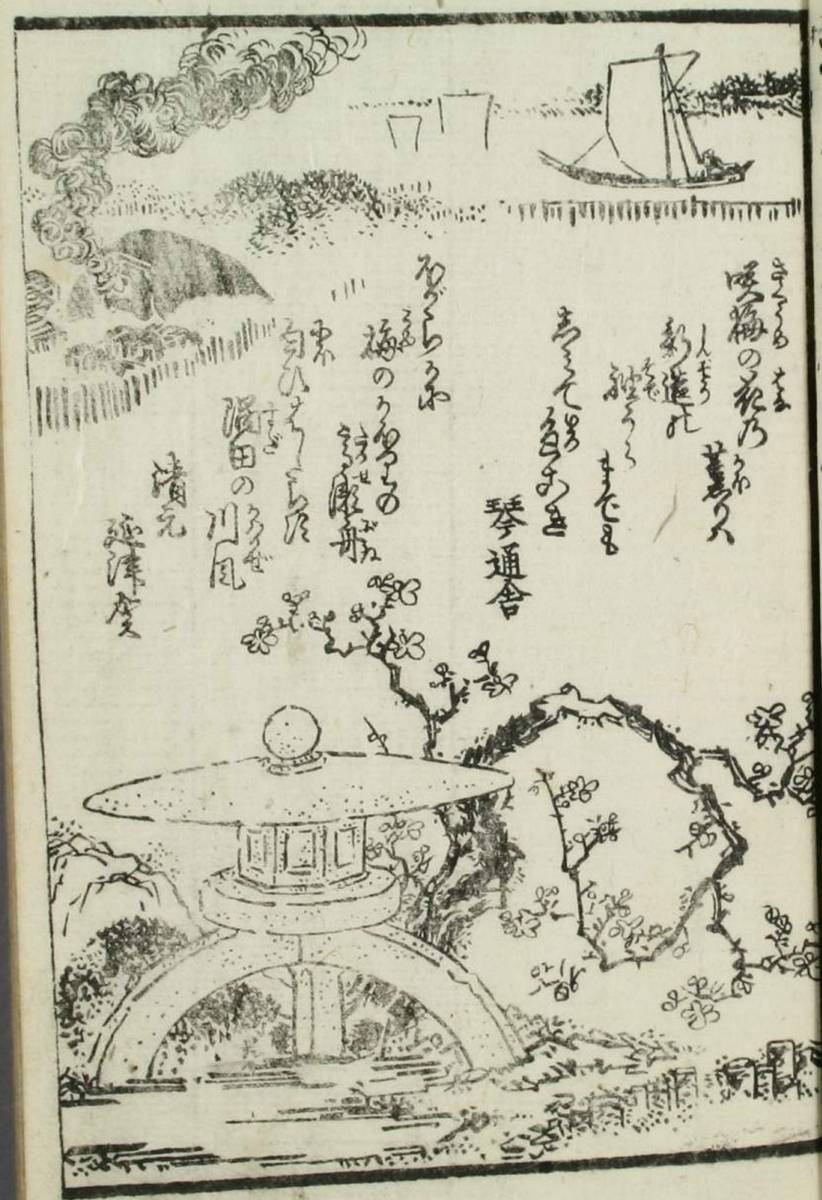
茂平花名所懐中暦二編上之巻

第七回

江戸　狂訓亭主人著

猫戸の寮の
胸の雅つこの絵やうなる浮世の中の吉原狂歌ふるまい
なのしるしとつく果てバつまづく月と花の孤毛
男つる俳句の憂苦労ぶらげての後よろとびまるぐー
ぐー　つらるるうるうるる咲るとて
うんで寄るまるるるるるるるる

ト聞ふ八節の延年ぶりに二條殿のうの釜
ゐ松の葉ふるとぐくすたくくと仕業の中ゆも高の清
たとえば色の変異ふ事濃家八高ぶ寝ふる廊の長家帳
色の別の庭すて紫山白ふ水の物好八ひふもさらふ高ふ赤造
金のふる木のふ青湯ふ塩本梅本梅ぶえんぶぐほ
ふく金盛実生実ふて源ふ髪ふもおりとまで本家
の普請中ぶくくふ温泉居ひふものまとと
梅がハふ八嘗ふ人ふ花ふ九寄ふ△夫ぶく



△ 密夫ハ。ギイ引ト琴ヲ弾ジ音もよき顔の女の振廓ハ
美女もいつくしみ深しこの姫月の如くにかがやけ珠玉のごとくそなも
つるく脇ハ紅白入まるくあづまそで尾燒なる烟草の煙もたや
濃うるこの刹とろ廓をちぐひ女郎の目覚いづまも
氣楽なるあぶけるさ極側ちくさ湯ゆく庭を見る
がら七八人のかぶろん接ハあるこ多撥あまぶ後藤
ゑるとく揚枝つくふあり撥ハ側ちくさ枕のまびれとさすり
あくびをするいまびと氣背ぐ涙を見ハ持ちぐふとしとるで
笑ふあり男ハくの男しきとふ一人の婦女錦糸を軍女
郎ハむりハ 強ハモシエ ぬしやのもの湯人送入つくおまひきん
為ふ人 ハアイ 私ざあもを久今ものそ
ぶあるうんぎあもハアノモシエ 吐月の狗年ハどんまきと
強ハ左様ざあもしまるけアノ花菖さんが 既ぐつひ
あるしまるけざあもす ナニのまん男ハ ざいと
うつサ 強今月ハ ハけませんれん 強ハアイサのけれんざ
七日 今月ハ 青侍 湯ハ いろれん ざあもせうまま

ぎるぬぎ早くくるまえ　ようぶざるぬぎの　後「それでもまだ
今ふかくえるもんぐるもあまえ　ハ見ゑ〳〵こぐもや
ノ花屋さんの西人　後「の先刻の守袋をおくれ
ものもりて来くるやョ　後「アイ　後「早くヨ
春水回のもり鄽中のおもらん　指樓のどを死
守袋をこ〳〵らくこ二の撓ゆうけることをもちこ
黒天鵞絨まこ八　濃芙あるこ八　錦厘板毛織
ものゆくさるぐわ見ぐ巾八大黒繻　天ぐ八ものも

めちんゝ疏ふらのわぐ八鄽ちくきまふ人の娘もちろく
ことをまを男ふもするのあるぐいやらゝ
くそよろゝゝゝぐ
地見倫ふゝ七ゝゝゝ

めるる
まこ氏ちうのかゝん梅ぐ殺ぐやくやの
ゆぐちふゆりゆぐ見ちゝゝるもめ
〳〵　ちるるちゝ　吐月左粗のゝ
ゝるるよゝ　ハ〳〵イ　ツイゝ
だゝゝるるれるもねゝもんぐョ

「ちゝゝるる〳〵　後ぐん
ゝ　後「ゝ　後ハぐふゝて
「どゝもちゝん
後「それ
後「それ
後「ゝ世人

だつても若様さん今ツから菅猜娘の倉庫ゑ忍び
往ねへけれどもあんまり甘ゑるから明日ぞお待申しますよ
作者のいふ此ところハちよつと一寸ひとくぎりある処なれど小ぶんのあるべき処なれバ
するね人小僧ハどよウ
若まつて人ト身をふるハせることを二三度ぶるりとさへ
目潤ぐんぜしふるくつひぞせぬ側に寝ころびて
居てるおなさん髪釵のものと見へてるが意本記なきり
梅ヶ枝「モシヱ梅が枝さんヱその小僧ハどんなに白鬚ぢや
甘へそまでよるら此間も深衣さんの客人エ子 「だれえ

花「アレサ八谷美の平さんにサ腕のことを抱て寝るまでるとぐ
あつきましてへ まことにそれよりおかしきことなり 深「ア左様ざましてうけ
あの時ハどんなにおかしうざましてらみ 花「ヨホ……実
情ると思川て子濡髪を出して子 深「アイサどふもくと
ゆ川くさんく路考さりをして濡をざましてヨヨホ……
うら「左様ざましたへアハ……きぞおかしうざましてらみ
そしてどふ表ましたへ 花「そまつつらモウあんとふの枝ヱ
平さんがつくまんへまく そまでもまでてあめへおまへがりのことを

摺戸の別荘小
笑く孫是仮役
ちくもうちゃ

きろわ人のりとまづめふるひ〳〵くあのひろゑ〳〵〳〵〳〵 泣
ゑぐ〳〵てまでもおまへ人さんゑ形でございまたといろさん
ざゑたく〳〵〳〵〳〵〳〵 小傍へすと〳〵 猿を立〳〵
風情まで 小〳〵ようごぞんゆく〳〵でもおるぐろるまた
トのひゑぐ〳〵 風呂妻を甘ひ逃出してゆく
憂ゑ中山もわどけるく乳楽〳〵あちぶ 傾城与傍
さまてど他風とことくろ まさま素人の意ようも思人
浮き沈の傍の憂激でゆるゑけるとふ一間の障子

の中のまづくゑる 仲〳〵夢ハ与の額張の立りの〳〵小三と称〳〵
今義盛の 病のの 寄〳〵 障まてやろゑ〳〵 眠る侍ハ侍軍女郎
巳新造のたゞひよ憂をくゑて 今人ろさ〳〵〳〵〳〵ぞきと人〳〵ゑ
形から落るあ〳〵ん 花浦障子のみより ちぶゑるゑ夢ゑて
〳〵小三さん 今貞ハ お年 よゑさゑ人 〳〵ゆゑ花浦さん久
ありぐろゑぎゑた チット 此方へ あ送入り ゑゑ〳〵 〳〵アイ
今ゑ〳〵障子をあけて 男人入ゑ 花 〳〵ヨイすと〳〵 額ぐひぐゑ
ゑるまゑん 小〳〵さろぐゑ何ぐろぐゑゑるさので

岩くにたろうあるとイすハ　花「まアちつと氣をたろきろと
時平「あまし　みそして義平さんのおあ遠の主望さんろ
いんお方が私の正人第あるみ　ちがそ様よ　病苦もあるア私
の身　きうんおあ　あまして此間の秘の使アまも　間あまし　ロト
いんまて　小三人　様　見情出人　あるねど　里縁の人も使ろ
ふ男人　鄙のくせ　ふんもこ　ふれて　花浦よ　使多ろれて　産姿よ
のうろうの　妻里　いん人の方へ　向へ　「おまのうんよく　あ
あ　ふまだ　これまで　お前　ふ　義平さんが　義平さんと

おなじ弟のお方と　お間　ひとおろ　ろのこ　ヤイ　ろがあるこ　ふ　ぎ
まア義平さんハどよ　ちん　ろのでおるとねえ　花「アレサ　ア　此浦
間の上人　おなあ　あ　ろ　ろ　ふ　ぎ　ろ　ろ　ふ　ぎ　ろ　ヤイ　あ　ぎ　ろ　ふ
ぎ　ろ　ろ　ふ　ろ　ろ　ろ　ん　ふ　ろ　ま　ヤ　ふ　ぎ　ろ　ろ　ぎ　た　ろ　人
ぎの様　ふ　ろ　ヤ　ヤ　ろ　ろ　ろ　の　使　ろ　ぎ　ろ　ん　ふ　ろ　ん　せ　ん
ろ　ま　ろ　ろ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま
ま　ま

ヤレ田舎人中〻是ゐんしゝこの姿宰へ入まられゐんしゝこのを
関度ホ為ゑけづゝ是つく よゝと宮ゝ ゝ おろを 主丶 此ありごの
乗も義を まんよ毒を春せるやうゐ めごと思ゝこがめ人
のかもゝうゐをつごゝゝ やゝく のとをぐらげゝゝが業のごく
為くゑおとしとこまゝと是ゝゝ ハナ 小丶 左花ごみすゝがみで
実 ゝ度遠ゝハごゐ ト ホロリ トとがすゝ涙の表孫ゝ謀の
めゝハ是ゝく側ごく関ゝ表是ゐゝ ゝも髮清ハ実ゝゝ
服ゝゐ是元をゝがせバ遊嘉も素人まゝハゝぬ女の清なゞ

髮清ハ素人よりも憂つらゐ中ぐまを自をおくるゐ表宮ハ
実の清ハあゝバ素人ハまゝゝの信切ハゝゝく抵女よあるぞ
ゐゝ個〻数万の婦宮ゐ是バなゞのゝ合郷氣性をさぐ
つをとゝく〻実を是バゞ〻ゝが髮髮買の用ゆみを素
家ゝくゝつけゝ是ゝも西を外でゐそゐゝ万別好ゝ
すゐハあゝをゝも伝ゐゝゝ郷のゐゐ是バ逢ゝぬやゝゝ
あゞ知よゝく是ゆ有ゝゐ自我不男も関丈の別ゐ
ゐゝらんを是ゝゝゝ是且四郎買ハ嘉是正ゐゝく完を

和くばるがよう〳〵とのべて　とうとう八さそなを走り六ツ三ツ
ひろく氣の毒なまま　主一ぢのもの遠ニフ　ひろうて人ヨ
あつまる　ものとも八〳〵でも　物の形なこと　仕出ま　そこへも　あまれ
とのつく　腹ひろう　あるまま紙も　毒ガ　中を　興ハが　煙ま
ねこで　八義ま　きんよ　捨されぬ　ものう　とても　遠のとこ　人ある
ものよ　思ひ　ひろく　あるの　あなた　〳〵　男の　切ま　立ちこ　あるう
ひろく　ひろく　出ル　も　あるな　文とれと　のみも　ものよ　人り　こ　物の　ある
ひろ　思の　切ま　まの　ぜんの　ごと　あ　軍ば　あるの　ひろ　ひろ

左様ぢうと　男の　イを　ちつぢして　寄つ　度　よとして　あるん
ものま〳〵　元　人〳〵　こ　物を　こうぢの　こ　人　こして　思ひて　居ること　主
不義　こ　ひろく　仕ま　ひろく　あのう　こぐ　ぢうぷりと　思の　ものひ　ひろく
あるの　ひ　も　主〳〵　すと〳〵　義　ひろる　こ　ぢま　ま　今の　様よ
遠ぢうく　若者ハ　思ふ　ふ　跡し　と　ひろ　だ　一　見ふ　こ　義　ま
出ル　の　も　こ　義ふ　ひろ　こ　時分　私ば　ま　覚で　〳〵　見て　来ま　ある
あるの　ま　人　ま　ぢん　ま　こ　ひろ　こ　ひろ　ま　和れ　様人　ま　ま　時　ま　ま　私
ば　一人　ひろ　ま　ま　ま　ひろ　も　和ひろ　ぢ　ぢれ　二人の　男の　ひろ　ま

遠ね人方がまいごろうなどおめの仏をあらして見れば
うハれたるようけごと松浦さんとなるゝ　めくらハ涙を
ちゝのき　小へ左衛親方よりくおろんなめんと義平さん
ふか国よりろくとやうでお嬢しうざのまりぶでおまえさん
のたろうひぐ是非一度あハるやうしてあてんなゝ
ゑ天ちさんくみて義平さんのためふうハやうゝ見
りてーイすあハくうちよろとゑうまもあ知ふまりやうふーと
おろんゑゑート身をひまーふく涙とまもえ顔ひわるゝ

薩摩安ふく娘女のうこ
へかゝるとてゆうたのまんまごぐまの路を殺極ふとろ
てゝ暮れど
へおめ人情実そのとうとくしさめをりふくさするとうト
鳥ちまり　小へ殺極ゞ来うこふゑいせんめを
と見る
へたゝてあうねばおとろまこと他ゆよるこのもそ
小まね
形節新造初極ゞ　へおめうん人舎うと寝ゑまーふう

晩かまくらにおとづれきたれるきうれきをうちつれ
ハ夢れるんしくられ人サノ夢をまのあたりうるゆしナトい
ハまてく小三ハ月を覚し　小ヘヲヤ花浦さんの家人ハ三
ちヘるんぐまこ江だまうも茶やノ者やせんハ　ヘヲヤ　そこ
夢ノ義ぐあり　しくうこ江ト浴く　ヘヲヤ　まこ義平さんの
とゝぐ伝ら義を江るまし　とふそちやノ　まり　芸男ふ者る
まこ江もさらく　むうこでハあるせん　けまど義平さんの　と
金さんの　とゝふ　付て　ゆ　ふ　ま　ま　使ノのるの義平

さんのこあどやノあるまゝ　せんうるまうあうまこ家ぐあるこ
あそる金さんのとゝぐ　むづうしくあるく　見こるまし　それ
とこまこと伝ふ　芸男ふあるこイすうるあこのせんトのうれく
まこもギックリと　猶ふつうる男の　男のうこ人　男のつあこハ　ゆくふ
うまうるくひまうもあうびこまあぐれくてその　年の　教のあノの
とゝふるん　伝ふ　むるしくあうしくあうこ
とこ初編ふあうもし　玉川の里　浪義平ぐ　義平の
浮ノくあうるとゝうてい小三ぐ　毛ふの一　会稽ノの窟

よりて玉川にいたりき浪に着してあやしき縁むすびし
結びしより

第八回　露かの玉　萩の花

賀茂の水三に似たる縁よりもちぢめたく逢ふも叶はぬ縁な
き結句憂き世を重ねし寝をいく度か脱ぐる衣を
あらねども置き添ふ露草や摘みし人のむすび縫ひ初め
ねぞ濡れし露の宿波玉川の里にしも住居をなせし歳
年ごろ寝に角まずれぬ小三の香思ひつゝ
浪にまた玉へいろいき流るゝ流用ありしよそよそしく二夕
夜ばかりを約束し鄭にたづねて情の二階に忍ぶ久
しぶり蒲団をかけてひそかに中人いまでる玉巨燵亭しき
あかつき晨後の名にも切まし小三に涙せきあへ人
ど波うちよせる其の風情露をおびたる海棠のさまにも
まさる姿なりけりしもいづれの座敷にや手すりに聞ゆる
唄の声
一○あかし夜の袖のうつり香消えそてまくら蓮までの

かなしさに涙て、明す我うらと
義経小三郎も涙こぼしわれ人先刻左右りてこゝをぬ出
さねんとおもへぬ行の稚小三八をもひせうこと
涙こぼしもうつ〳〵拝しもまこと伝平や国の風
一流士の涙やくこゝまでこゝで涙形もめく出刺蓋形ぬ
今看ましらふも松のうつまを見はまるこゝ
義経サノ中ーねんる小〳〵こゝだろうハおるー〳〵ト庵
関人頼をめてく唐ら義〳〵ゆうちやうこぼの軽だ

らうじやうねうう涙こゝろれねんこの涙ハ先刻うねの
すくうるがとこうく国せくあるもうく涙をーと
だんアねうう一生やうもでもうくこゝれめ人早くあれを
よくしこ遊着ふうく今までのとこうこうねのこ
だこ男ふくさらうこくくまこ涙の松つきこの憂
つこくこを着の出ねこと男ふ男をまこ
姫様中よくこうこ男人まこのこ
逃ハアいあ人まこい小〳〵こうやうぬのこぎ

ひとりの人ハお三さんとやらに行へなどお迷ひなんしたその
ときハ初手から私の身の上人何とのが今でハ意ハ
の藤命ハ三きんよ何く居ればハ実初からねへしも邪魔きん
するのもどうしておきよお三さんの秘め事が為めてきた人では
どうせ勝手をくんぞ私の身ほでも病気がよくなりハ
いとしの世んから死ぬまでハあの起請ハあげやうとハ言
せん死んだ跡でどうともするとまえましトすねてゐる
義「十二蓮着にするとねへとものあるかのそうして起請を
あまくにきせんといふのが望みじやアねへかわづらかしんだ
ところうらわれるが宜い義「それでも呑だ甘人小「おまへさんも如何
我もあくまで義理なところをお前さんちやうど左様いふなら
なればハ他人はとうのんで来た者呼ところハ出来ませんそして
義「病気をなんといふのハあんすうる此頃お病気ハ治りイせん義「そ
アノやアコレまい合点で薬を精出して呑めバ治るワ小「だ
と人治つてもあげうるものでも私の命ハあづかりませんの義「そ
れじやア無理に死ぬといふのかコレよく考へてごらん命から

二番目の舟よりさきさきの人の騒ぐまちまち
ひゝまとゝ様とも程もなく一人を残さずみな
あるじやうねんの孝のつゝみぞうろ死んでしまつて
まことに生きうつくしく出来ず中くら
ばんもおよとりさしの者ばかりの顔をこんそつする
男のの心をヤイ者うり関いしうり流れものゝ極ろ
たゝ一ト男のよと為くうどをしたりを義堂ぐ
よりつくおゝくゝ切まくばつもおしゝれば男ひげ

自分の身の為に生きて帰るべし一日為ぬなら
自分仕義に生きて死切れくおもの訳ゝうと苦らうを
ぶまれと男ゝうくゝョまぞうで訳おろうでもあるゝ人うろ
ろの男の人ぶどのようなる風ゝの学問ぐ出来まひりの
でるゝ人ゝ人どのようなる訳ぐあんゝんしても記憶
ゝどもゝ自分ゝイせんゝでも学問の心ふるりイを
義ゝ学問つまうれゝ人とを心ひつく浅瀬を渡るごとく
ゝ生よりろまゝく記憶出しれゝ人ゝゝ生ゝ

あるとも紀清を呼び帰りうんちの人義「又五郎殿
のゝしるべハナかゝそんをうとうのぶるを今知して上やうにと
きどきを引メ高上り男の切つきるを襟ハ丸細
ぢあうんと窟へバ清窟とろとのぢ顔を出して
室れ草屋の引出し〜ようの取ろ〜しる紀清を
いぢ〜義く男意の くをとろを被ようく〜行身に
紀清を高つ くを振りせきをつる涙を呑ときぶら
はの内にて唱ふる佛号「たとへバ極楽世界で此家
そうまぬ中 ありもも赤茶 義平ぶ妻 涙
陀佛ト覚悟の折 ぶ清子を乗て清家を蒲
花〜小三さんぢゝうんしこぶ五うんしこ義平さんぶ来
うあしてさぢうまこふざゐせうゐ「ヤトびっくり丑の刻
踊〜 ぶ〜ぶ切ると高イ〜こと楽してもうんまうあし
涙をうくして嬉〜そふよ高て月を「花「月と姫〜こ
思ひあうまをせう意角 命を猛ぶ大うでのあるこの子命ぶ
あれバと今の嬉〜ひこぶもあるをいんのぶるを出「五

其八左様ぐもあるこの子のサ縁があれば命がある
あるこイしても縁がなければ生んみもあるこイせん　花「二段三
世ともの人しこ宮人は切まねばならぬ浮世の義理
らの仏のりの様な実情さ心ろうりのもぬ方が
まま場合男くらあるのもの仕方でもまだのみるべ浮
世の義理ものもしまのと残つた人が海海しく
もうるぬ人の命たの心底ふわざまるく動かの房ハ
持ものと男全人でも引込ぐくるる人があるこあが遅ま
だあるこイせまのうちの兄弟男業の大切でハあらせんう
よくく男業を考るわしとわるふあるこもあるこもふるハテ
まるこへ　花　死ぬのハ道理もあるこイせんト
花「ふん私とこしこぐあるこふ仏でるあら精ま考已
るこもるこの常るこの如の賞罰ぐあざるこいすト
花「小三さん男の初義よ仏もやるぞ
ぐうるんすよくく関章あるこ　小「アイ私きやう
うるこえイしこ場悪しと仕方をなしたるこんるまるト

[illegible]方より義平に見せ　義「コリヤ[illegible]何者か　肩
[illegible]をするのぞ　小「何者か[illegible]人まさん別れる[illegible]
一ト思ひとなるその[illegible]姫はこれ見るまシト
何騎の間[illegible]用意や[illegible]けん雪の孔雀[illegible]
びらをまづ〳〵そなへて[illegible]せる
義「そこ[illegible]いよ〳〵[illegible]ふとまで　[illegible]「[illegible]　義平さん
[illegible]のうちの義でも出覚ろト[illegible]ぞ現
義平「[illegible]〳〵　義「ハテけ〳〵[illegible]

あるうち　義「[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]男[illegible]の俗名[illegible]今は俗[illegible]の[illegible]何
[illegible]三[illegible]遊[illegible]
[illegible]三人[illegible]小三の
弟の[illegible]「[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]小三[illegible]
[illegible]涙[illegible]小[illegible]義平は

愁の悲歎を探るくやしさもいづれもおしき恋の
欲情臭ついて居たりける
猶子の別荘にて小三が見たる夢のさまを今玉川の
里の義平の見たる廓の夢の八合して首尾よき仇
如し 有為転変ことをまた見る如く その都合を察し案じ
にまかせし夢といふべき 作者元来との趣向八夢よ
ことよりさく小三義平が見し日の意情をつゞりて
初編に繋ぎせし書肆の乞にまかせ夢めしく

夢のあとだる恩の深き用じの義平がおもき
ひく小三の一念玉川のお浪がうつることまし恩とこちの
縁下をとめてよく深く縁をはなれば夜が明けし
たる人情の奇なる夢をまだ見るばかりでもよい
べき一縁を後にあらはしまたを中途よりすぐる
ことわられ一家の筆癖より流れの書肆へわれそぞ
し
読む世のかへるへし

花名所懐中暦二編上之巻終

狂訓亭 為永春水 (seal)

茂平花名所懐中暦二編中之巻

江戸　狂訓亭主人著

第九回　辰巳の里の朝貞

俗も中野の田舎ゝゝ茂平左衛門渋ぐゝ退れ来るうの
玉三の沙汰いろゝ尋ね歩べ中野の村ゝゝ西瀬
ぶもふ十二郎ゝ引ゝ乃ゝ長枕ふ
頃世間ふ知ゝ長ゝる角力取ふ花王山書平太郎と
かゝゝて悪漢ど逐ゝゝけて玉三の

男のうへを閉じて便ふ思ひまづ一　宗ふ傳、てのう
ゆく義平の子細もきて婚姻世話をかくつくへ人しと
花王寺の家に連うたちしがその花王寺の女房おとと
ひのものの知やきしき生産あるく五三を やたらしく外絶をうるが
お三は大病のまうど金時をるくぬうる義平の腹は中鶴を
出うるしるを男へ間うるく逐ふの羅義ふ出をくく義平ふ
別宜てしさのうへをもうくうるの十二ふの悪漢どものて
逐とうりのよくく危き大義を花王寺ふ入けうるまるど

その縁きとうり血の道のつよく發動て始はしく敬公の
どをくなるとしるべ行ものもうとうね義平紙尋ることも
おのそひきあるへふうくまづきて當り五三の毒義紙
看病しく猛毛月日をるを中花王寺ふ八角力修
ふのうるを清の方へ猛ふしく知きしく家ふ入ふ
留主をやく五三の病気ふ治りるれども花王寺の女房おとと
大病を頻ひきたるべふ危高き出産きとの留主
由多く用ふとるを家合とうりうるを五三ふ金の孫もが

つくるを羅紗といふ男のしやれ者とありて
おもをもて見れば其のたとへを聞くもうれし
あふ顔懐剣のおめらんを通し金根をつくしすごしを親
達の眉も不貞尾ふく今は勘當も同じ勇とあり一向あ
ひ赤知れずに嵐くまつく業じ然べども塗方をくみ
細くもくらくくるが出くしきやふとろこびは身を修くく
姉ぶんのお身とりつる憤ふくくもの顔をぞうち解てあ
言さへもやうとうふ笠ふ姉ら姉うを思ふ人もなうを

ちぶまを縁の家は姉ふ川の福善の横町ふのふとろふく強
強ふくねば金もふく者ふ人が姉くれと思へ今ゆて不実も
せぬ上下和合の睦まつき実ふ義くくしくふ此の家の
下女は磨ふる潤垂布巾ふくとふ様をして居ぶ「ヨヤ
三吉さん大ちふを逢上るすりくとぶく顔が赤くなりて
又二 ののおさんふお筋のしもとをうて 三「ヨヤそふ久トのひとぶく今湯
上あを帰つくと見へく手拭を肩ふかけうぶあ事流へふを
湯く 三「ア顔ぶあつのト完ふ笑ふ 三「モウく縁ふ礼雑

かう子松しやア どふ甘へるのと思つて耳松しやア 手ぬ湯が乱雑と
となりつくへ来るのはハト 女「十二湯が入込だとのさ
て手桶にちぶるともものぢやア みの人ぢやろうぞおちふ人
お尻の給ありふあらんで居る時もんぢやア 竹のだらしから
ぴちやく ちやくうへひくまつるますと〜 何があるこまりはハナ
ハ〜〜、 三〽ヨやく いやる狩人 ホヽ〜〜〜 ト 笑ひながら
万蔵もゝうりて二階人あがりくる となりきの三ちやちの 見りく樽の蚤を
お勝といふ女主 ちよんと三吉を見て 勝〽ヨやく いちの

間ぬけの三吉ハ帰つたノ お辰のいふやうに 笑ひ声で気が付たヨ
まく大ぶ逆上たノ 湯でも手めへ達ハちつとハあるく
なつた方がいゝよ あんまり白ひと ろうのようだね よ みぐるしい
女〽左様サ 此方衆ハちつと赤くなる方がよふござりやすヨ
此来かる湯の込合時なぞの ぬのがよいぢやア ござりません
ませんのハ〜〜く 勝〽ムヽ そんな下戸いひ顔をすいく
やるのヨ 湯上りがろくッちやア どふもよくすれ他人ヘヨ
そ〜く顔をする逆上が きがつくいくもんど ドヽく ト

のひあがり階子の陰へきてうろ〳〵サア上んなさ三へアイト
のひあがり先へ立てあがるうろ〳〵勘吉へどふしたもアノ三
ちがおひがりでなひうろ〳〵私へとてもうろ〳〵先へうろのまうヨ
彼方へ隠くて居るのハあんだら人が見る格でゆやでく
あるまいまんそれぐらうろ〳〵きん此格ハ逆上まはるものヨ
クコヽ氣の弱ひこのうろ〳〵格ゑるものでハ殺生人出ること
ハ出来ねヱヨ見うろハ少年氣弱強くしくおぢこきん人
出そも引ゑあうろねへようハあねへだやアあうねへヨトハ

なるべく階子の上へうろ下を覗のうろへお屋や勘吉が帰り
なるおく居うく貴ハうろ〳〵多人も渇人ハなるヨトハ
つ二階へあがる三者ハ鏡台の引出しうろそつ紙
出〳〵ハ屋へ茶碗の上へハ三ハ如何ハそのうろそう
を撫ゑのひうハ鳥を使うけちゃんと多入合を〳〵
片隠うろく多屋その男の貴殿ハうろく居る撫を
撫く一三者の茶碗を撫あげ表ハその撫くまん殿を
留く盗ハ〳〵大そつて出てみるのうろぢうまハ

多の
中埜のお三
婦多川の
三吉と
名のる

孫へ〳〵こまつさたもつぐ毒毛の生えくみること人サそしく今
までの顔へ金程角ばくみるうらこうのヨおめの顔へ哭
第和とすれくおうれ人けうやう似食へれ人ぐどーまぐう
顔をそうそ横ふちくのひくぬ格ようめくあげのひうを
あぐうふさすう独へまれうけくちうのと作向せ横うち
見てうりあぐ〳〵くうくそうちを種をふつうく居る三吉へ
小児のどくく自由ふめぐけるく移や臭をそうてうらひ
あぐう 三 頭つくうう宮おれもうぬひぐふ毒さんど

うちうさぐきくうるうらへと思ひまはへ私〳〵やう初年時ぶん
顔や首筋をすうまるのへ深くくうくうりまー
うんぐうまくう今ぐやう独りで流人の格ふすうく見てうれと
思ひまはうれどぐふもふ気用でひけませんヨ 四 ナニぐふ
たてなが為身ふ一人ぐすうくとりてう他人が眼で見く
すうそうまるようふへすれれ人のサそーくあへうんぐう弱
のせ生殺へだううありのとぐ他の生命をーく顔うんぐをすん
ぬきうんをヨ顔へ病でも付うと大変ゴヨ 三 アイナニとうひ

わたし独ぐすりハあるまいせんヨノ諸方の女ハ気やびハしや
元ハこんな姿様さんかお内室さんにすわつてゐらのまに
かね人 お勝ハこれ徳さんのそこあまりまきで姿がる うつて 不義ハ当くの思ひくにすわく
貸ふのサ米家を上りこのものハまへに元人がさぶにするのサ
ずつと久しい此むかしハ旅する叔母さんと云く髪剃を
持て出すつて廻りこまのごとゆへすずつ今ハ立腹な
聖善るところハ気ねへのサそして女房の伯母さんとゆうく
女郎衆の女を代筆にしてあつくのもあり、と言ござそふなサ

三「ヨヲく左様ぐごぶんあくしてろおつしやねへ 勝「サア顔ハいくヨ
もと様を向ふト此方へ落ちり毛様をさにまりて 多「サア少し斗
痛いせず地をすとしねのく当てすくらまふちやア生際
が調金としねへトいふあがらく形毛を様にかるお手際但ど
お宅まるる見習潤女の雅者にと見へて
「あれそばらしのうむくをのそまれし教留ぶらみが
あそこなんと女ハ料理に入まらに思ハねどかぶるとふの名月
今日まで肩上のみ若めと母の沐あるお情まう手らく

[illegible]

なんぼ[illegible]

[illegible]

二人海の氣で[illegible]の

ヘサテ片方へいよいよ向きをしる　三ヘアイト向キ

異ビ　フウムト溜息をつく　勝ヘヨヤどふしたこと[illegible]溜息ばつか

てョくしくしく今のの片方ごョトのハまく三ヘ[illegible]の

毒そうな　三ヘヨヤ姉さん左様ぢやうまのョうノ少今行あでる

溜くみる清元の浮世理をちんみりく聞くあるツイ

溜息ばつかりョ　場ぶ[illegible]しくあるんなさんナ

お角　おまへさんが拾をすりくおくれごのふまエ　勝ヘアレサ

とのこみアこうせるよそ[illegible]場ぶがりるものうナそん[illegible]

ぶづのをしてハ座　きハ出ばもりさくしのようごョそ

まそうなあの上ろうを聞くあつとしこのごョもんと

よく出来と浮ろうき延寿齊時ぶのぐぶまたく

浮世理ハよく出来るのサトを拾くいんど抱ろとの

三たび目の中すてゝハ葉でも出るでんら

第十回　鉢植の万年青

さても三たハおもしぶも耳ホのつとる洋らもの文句ぶ
下段角ホあるる名さ人小三とものぶ名ふ組者　一人の
姉さの紙今ぞこゝろふとえつく　三〳〵くもうく　きんホ泣のて
居らをふさのぐ　あるまゝせんョアノ姉さん今のハ顔の
小三とやらぶ子　勝〳〵　左様サ　金ゐ弟の兄さんがひて
ふホ小三を泣んで離別てゝ　ゐるとろ左様すゝる金ゐ弟あ

ふホゐるをいろ〳〵ホりゝまく義理づゐふ多りく泣ゆも
多ひ兄相づ〳〵といゝこのを金ゐ弟ハ涙とおりゝく
勝しゝゝら小三の西人ちのんで教〳〵ちゐハ人とおゝも
つく来ゝゝホサ　三〳〵そまてもこゝろさまハちゐせんゝゝゝの
親人　左様ト小三の出く居る遺恨ぐ　信実ハ見
つこおぶゝゝ出ホ泣ぶこのサ　三〳〵さぶ姉〳〵ゝゝと
ゝゝゝれ人そ〳〵く洋ゝゝや芝人居の狂言でく男も女も
洙ホ實ぶあゝゝゝよョたゐ人一見ハ生別ふ多ハ

もぐさしたまと絵ゑ 関刻ふるうそれが楽しさ
だわんとうがひゑ 世そその中ふまとも関ゆう 仮ふの澤
留理

「きんの男を持ゆと猫のちゐ八頼堂の男の文字に
絵まえを きんとおろしてそ頼ふ頼の小三とえんぐきゑ八
きんとその上ゑひゑ男ぎゑ八ふ世ゑ者知れるこ
ものゑと書えふつとらいたくの雖しうてゆろのなんのゑ世
東

「サア資淡 絵もいよつゐでよ 絵白猫も中ふ生澤へ
すり絵ぐ ゑてくゆらえ 絵を桜と毛の完が目ふうろてあら
ねえまでろうゆる 跡い雪ふかろのをすうとまねくとゆけ
絵へ 三「きんゑ左稽ぐぐいまにねへトあのうろゐあぐら
三春ぐで一ゆ浮ろりを 陸く文句八遠へど乳ゑの上
中稽でゆろ毛しその人の 今日生て 偽りの初稽ゆの八
りやのことでもありいせゆろりまこ再 今時澤乳ふ
いまの活業を 英理西ぐでと八 知うもしく 巻相を

つらいせまいうと若い人さまを考へて今しも聴の心
浄るりの男婦ハ各聲音順女ひねりもののじやと容
人よ知れまつるのを訛廻してめぐりあひさま時ハ色氣
のあひもかすへ女房とどうぞこまらして見くらひと細い涙の
十分をつけせじとかくす真織で鄙をふいて候だらひ
皇ハつゆまどあやめくよくさみの出助が表まつらた風
晴ハ早命も出とりぐらしようらしくとまを考かしつまへ
クサア〽よりしつかでまちおりと白をば作森てゆるのの

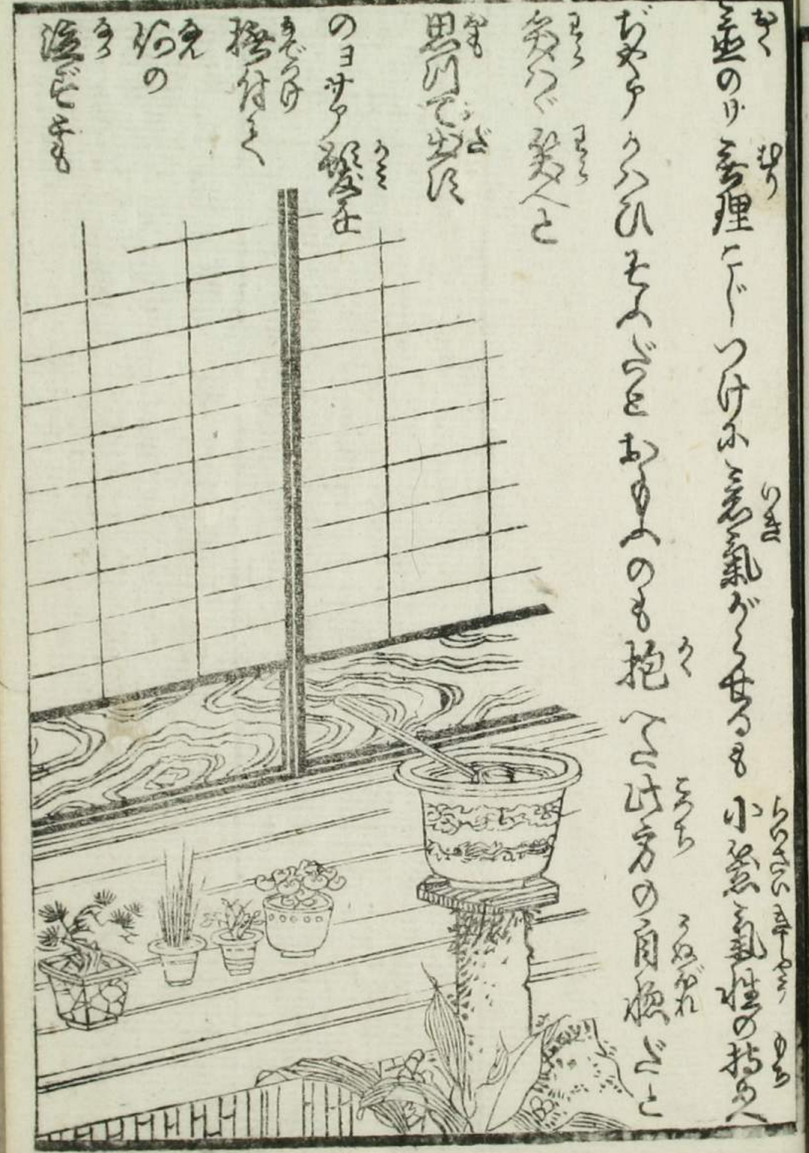
汝方を向まいや此おかよ涙ぐんでがつぞ表つつ顔を見合ね
ふさぐのでナあつしいさどのよ　三〽ナア二ゑんみもふさぐ様子
とおハないかまどもチアノ浄るりがどへもようくりてしくツイ
ゑんみおつくら彼がら涙がこぼれましたトまでも涙を
ふく　勝〽浄るりが氣よりうさといのへを顔ふ涙
着もあるものゝ金銀あるひハ氣がちいさいから顔を
理の猪どころハ身よ表るぐしくなつく来きく様よ
涙をこぼしのぐ余るを顔を身よしてするを親の毒ミ

化粧の二階
より空ゆく
丁を見て
男のゆく末
を

まゝ女ハそなたでもくらてハるゝ
ものゝけなど此去地
ゐんぞでおゐ人のようゐ氣ぞ
ゐうゐんでも氣細大きくもつくたとえ今の浮るり
ゐるようゐ　三「そこ〳〵ナニサ　ナノ上ゐるゐ
左ゐちゐゐ　その苦労ハどよもゐるまい〳〵生も老
ぶマア　ゐゐ人が左程よゐぢり芝居や　この顕　流行
人情本の文理の通り形〳〵居ゐ居くの男のゐ
ゐもそれ〳〵の苦労がゐつくちゐゐゐ実ゐ出ゐ

勝〳〵ゐとゐもあるゐのゐ　名主ども　活業ハ浮世　人〳〵の
心の繰ゐ　で始終　大抵〳〵　行ハ久〳〵ぶりの人ゐ再会
て昔話をする時ハゐ〳〵の花咲ゐ　ハ見張ゐく
いちゐアゐ〳〵ゐ　伝ゐもちゐと気をそげんで他人ゐも
原ゐ人引をとる　まゐと　ます　ゐ〳〵ゐ　ゐ〳〵ゐ　けもとも
ゐの形〳〵の　渡世　大ゐ　ゐ　ゐ人情を〳〵ゐも
人ゐ勝ゐとゐゐのゐ　ゐ　ゐ　ゐ活業でも
宮のあるのを嬉〳〵ゐのゐ人ゐゐ〳〵ゐ　ゐ角他人のゐ

の長ろ所ゑ一雑け方の女藝者一
ゑけりそアゑ〳〵ゑひのごけまどかの〳〵きこ只ちめへの
ゑとゑ〳〵のうゐい〳〵〳〵いゑゑ惚く抱つるのごろ〳〵すこ一
この場所ゑそげて若ゑ男ごそれごろ〳〵風雨ゑ傷田の
蝶も嬢風ふ法〳〵ゑ行かゑ〳〵ろいい濃くつけさせる〳〵
俗ゑゑるな〳〵振袖で弟新舞ゑのようふ衣裳浮絵
を付の若ふ脊負せて庭〳〵きへ出〳〵へのこなれとま
さろ方振もゑ〳〵ねへ〳〵〳〵兼角絵ゑもを乙女風ふ〳〵〳〵



ゑ巫のり理にごつけふ差乳ごゑ女るも小差乳性の抱へ
ごゑアゑひそへごを抱へ方の角振ごと
ゑごゑ男へと
男ごで出ん

いくことふ涙とうう眼瞼ゞ腫だつたく赤さソレ見るト
後を向る三吉八完ふと顔を赤くしく　三　姉さんかを
ぐらふ縫ふさつぐりと出ぬ〜ショアノ姉さん今おまへの
おつかの家形の髪子と母八出つぐりげいしゃ元久トそる
赤を縫ちく沢お給八髪を整付くあつるぐら　ココ〜ク左
振サ　ろ八のらしの振袖サ　金辯上ゝ方八島の藝てゆ人品
八のくれど髪子八浪風ごけ搭別品がいくのサ　日是づく
○関ふのふ逸来娘子達の髪うるら風俗のうるら人貴

勝ともふ年増女の風を好きうるめうしげおし勝
紅白粉の色の濃を非ぶ言ふ色そーうて高額月濃
する娘仕の出ふおちく紅ひ切を嫌く新事をうけ八
けゆくふよけ是ども天鵞絨の中結の裏紙ふんどのが
尊しとおのふねばまれて惟ごく見ふうぬ奢の西る
すう形うぐ出ぐ是を深眉毛おしくうえうく
紅唐子の如きを丸髷ふ揚ふうけ八少に赤ひ切を付る
顔ふ八人情ふうくあるうぐるの面を多ぐ〜そもく女

のゝしるの人男とちがつて齢老年くまさに化粧を落くとも
人人のうるさも今ふ日ふ嫌くさまくまちがつく親をうるさ
たやく老女だころのうりそれ婆うるを正しくすると
かるすぐ好るの業こへめしぐ娘ゆくらへいのもさらうり
うーま 年増女とのへとも親女を寿くなるのに結ゐれバ陸ら
ゝもふ会ゑのれく人后のやーうるへやうふたしみこうるへ

婆の垢をまて
寿を落ー
嫌をよくる

初みぐ重

三十二孔

仙者家浩の妙薬 京橋弥左衛門町
嫌ふうぐ手のの
めぐるぐ手ふ
山ぐ

書林 大出島屋
責弘中

㊀のつぎ 三へ姉さんハ京都とやらへ人ゐるのゝ 勝へ〻猫葉時分ゐ
繁子さのサ 三へそくよりれ人そそでもさうもう 砂ーをして出関
せぐくるれ人 勝へすこ女ゞ京都へ行こと思ふくる流ゐ仕で
も連こう仕方ゐうら繁子でも紹ーく金盛うて繁ゐく
行至の京都見物ゐうのゝまてこうるゐ京大阪
もるけまどめんまて都合のゝくこけで繁りもーゐの京大阪
見物ちゐくそゐと彼地のことをゐくことゐくこと繁ぐ
うんうゐ他人ゐへすーも出るゐ人のサトその者のゆーを

卑下なさるにもおよばねへ。お前さんと云ふし中にやさしき女房
たしかに気ハげいしやゆゑ さぞお前ハ女らしくなし嫁の
このお勝の心の中ちよつと男のやうにとこのあたりの姪若
婦人をとめにおいて宿貸の目にかゝる勝ハまことにこれをたのまるる
編の苦労ともなりぬ。この寡ぐらしを顔向にもなれど進み
或ひは遊びの着作者訓亭によき智恵を貸す
へと頼むのみ。○三〽姉さんハ誠によくおしへて下さいましたねへ
其時分からおまへさんの今でも其ころのおやぢト

いふのお勝さんハ美しくて 勝〽三吉さん酒が嫌ひでござりますか
でも聴とくの 三〽ヨウく実正にきらひ 勝〽なんの酒を
いふハ思ひ出しておかしいが嫌ひでもすこし呑むとよく気が
たまらないのさ 三〽アイ 勝〽サアく十二分に機嫌が出来て
三〽誠にありがたうよ 勝〽ドレく今日ハ勘定が
あくる日ぶらぶらアノまアお辰ハまだ帰らぬかと
あれハ湯どのへいつてトいつてからお辰ハ鏡台
隣のおかく 三〽帰つてきてござりますか お勝

勝子がつまとるがる　勝「こまかく商人さま九兎のまゝびしかりく

二人りとも　二人「承しくなく下手な郎一心み　二二とゝ独吟　三「三拿

とぶまって手にくとトいふがお勝八仁図　勝「兔ござ人　三「ヲかくく先

刺の浮るわらすぎ口舞ふ　勝「手のくろげんかつ主すチヨウ

かるやま一さ主を持くし三ちがり身の季ハ多く狂歌所あれ

ば苦労も多くいふよめ人まに永きの寄ハ諸君よろしく

たのみことを願ふ

茂松山花名所懐中暦二編中之巻終

清元延津麦校正

繁茂花名所懐中暦二編下之巻

江戸　狂訓亭主人著

第十一回　河岸に咲たる葵の花

モシなまさん河岸へ出ますおれをさなまさんどうぞ河岸と
いつと嬉しそうな出かけごとハ満室の娼を繰開散の酒
八丑郎の情風章く出行と八浮人お顔でも経く
及び腫見の寄蜜なよしみなるお液だろく薬店を
喰ずに及びハ個門を出る時の捨言葉とハ先哲の守もり

其糟粕をなめちらして今様らしく補綴なす婦美川
の當推ハ梅ごよみにつくし尽せバまたつくさーつきせぬゆゑて
志らぬ浮人情の実をつけたく婦女に異見をあたへんとする
のところに埋野屋といふ閑人ある舟宿あり女房ハかしこくし
座しきを勤し異客とかく媚才なくいふ事も忙しが合ふ
由緒よおのづから風雅多く移るあるべし其中にてとりも勝
りぬ艪の出し入き舩頭舟さへ絶てなかりて船頭ある
されど甘こと多く客ども宿主ハぶつつくしてあまりけるが痔

との穴お實子の男持と見へたる女房ハ稗史者流の狂謔を
いふ合巻を上ミところけて火辨の胸に逢 女「わりの草双紙と
遠川で寛濶のよふで面白ひといふ下之雑儀といふ本宝の
美元仲和の新板をの川く来る 女「ヲヤ新版が読たい
ねへ 雑儀「ハイ梅ごよみの發端が出ましたに 女「ヲヤくド」
恵の會といふのか 亭主「ドシく其梅ごよみの発端で恵の
會にハめをがそへどのぢうと畢やしに外題がならべものが
三國志の跡をおぢする表紙三度ふ四度の題を筋ちうとのよふを

三度しかうんしんゼモウ暗死で
明日八きろを續ぎまス　女「そんな明日来るときも
ゑ姓のうするのを一冊もらく来くらんな　男「へそうと
まるとまるとト出くるり引遠くく　お庭の美乳らしき
人茶屋を見くひとんと遠のうゆとくしるぐら　男「イヤ
ま婦しくまと本だり見くくらいのトットもふ氣ぐ
ふさぐ　さぐぢやうナ　好くといそ頂俵も甘んじや
それでもおもしろんとぐ沢山とあるうんな　女「チット遠で

広覚しましおまへさんの情人のことも着くありまス　男「イヤ
ゑ是ぢやアとんで見ようのナゑしうちりとするな
ことも知れとふのナ　女「モウそのうんふ通人ふ多うすぎ
ちやアのけませんゑ是ぐるそうそうとうく個女乳ふ
氣をのませるそうぐ　此間も浅ぐ船の裏あぐら
でとあつことりふ湯を聞ましこ性ちるをるさうとまま
せんヨトのひるぐく着花を浅んで出を　男「イヤ手紙
天ぢるるもしるとつぢやちやふあをとしくらくぐんせ

女「モウ出来ましたと居ります」若「イヤそちらやめるとがくん今度
つとめがあるのじやるそんなまつとまつすぐ」女「アレアきつい せい
とみごろ うの方をりなさる」亭「後やアまつすぐ青知さんをお連
やさろせん」後「サアア青知さんめいとまをもうし」女「ア澤つまも
ちあのひとつふ」亭「ナニまつすぐアア後やさやくお帰んなさる
ようふさろせんヨ」青「サアくもうのそぎだやくくトひろうで
うのそ出た」女「モシエこのあの中のこのしまふ見えるまま
ート らがしてあいさのうばるる」青「ヤア便りがしてあいさのうばるる
とをのあてとしろアとしろめうちんいろくころ
らぬ正八きくぶこのしまちやト参を懐へ押入れ
桟だーとうあん私知ア準備のまぬびふく顔を
うくーとろうぬ鼻頭をうひるがう潰をゆく扨帝
来ろ八年の路三十歳ぐらひお爺ろる所の差見形
家早家を継べきとろるまども親父達者ろる更
見ふをあやぶひようり家業を ゆづらびまくく見ふ
こまを要ひふ程とくあてびく 綱楽とりふ悪名も清ど

軒をそゝぐ
ゆぶねのいろも
初午の夜を
はなまつとれ
則ちのうりの
河岸うり

さてさて、男女通とよばれまつく個門ふその名を高くれ称さ
上ゝるの辞判こうく喜義さんがあまつでモウ一限男振
がよろこめるこうの隔室のものハのとこびを拝れ
だらこうぐ二百いこうハ稼へものゴトうきをさうく一個の才
子紀の國や義といふ名を異しく森義さんくと
かげでもいろく閨房の好漢義ゝイヤ此間ハ女ゝヲヤ且
昭和紀まゝ亭ゝ義さん いろ〳〵やいまゝ昭月ハ
あゝとぐうぐんじまゝ女ゝヲヤくあまゝ昭日且形ふ

お馴ふうこうの人亭ゝ左右ヨ藤沢藩でお目ふうこう
尾張屋のうるぎをめきるわぎ ぬらこうふうこう女ゝヲヤく
左右久宅ハ帰ふくすと〳〵もそんなたうこうを高きう
稼ふうツイお稼もヤさうんハふいつもうぐう且形あり
ぐうふ義ゝナラくうぎとのふを多狂ふつまく沢こ
のぐそうふうそのとまぐうさう女ゝイヱモウ先制おあで子
今おまさんの末さう高義るのをまちう稼くゆきを
おまぐうくやうくぐうやうくぐうあうくゆきトいう稼

聞くより密夫の奥の方へゆくらの時河岸より上るを来
る人彼婦人女川の若旦那といふ男人といふ男〜 嘲女の勘左衛門
いそぐ〜そのあとを追ふ 女〜ヨヤ勘吉さんどのをいそぐ〜るぜ
そんな事ばかり世ろ〜するのぞエ 勘〜イヤ是ナニ今の中でも小猫
を抱ゆるとうめよりそれて来るハアノ子ト 女房の身人
はよりせ志ぢ〜く 嘲く 女〜ヨヤ〜左様うそんなら
勘ふ 勘〜アくどあぞあの子あわのことを 女〜アいよ
ち〜此方の女でもつまらぬ勘ふ 勘〜ナニトいひなく

ふり立〜くいづく〜て姿をうくせるとなの河岸上げ晴の
出来栄まてく血尾を上波あるべ所の葦の根ふ掘て
きそもきこと〜ふ河波あり夏涼くなるをりのとも
蔵の忘れざる蓮海いろ〜の下〜く波ハ〜ぶ
なく浅瀬の年先のあとべハ河岸の石垣の完ぢをを
いんとく〜く舟底の志蟹陰ふ〜ふる いく魂後ハ知る
ぶ〜〜波志蟹ハ二腐あく〜ふ〜ぶの美尾を喰ぶ
巻〜サアめ〜〜く屋根く 清〜アイ今アわ〜

義「ナゼぐつぐつ　清「臭ぐつ加れくいけるひのをト炙び
ぐつぐつ玉蓋の殼をこれる　義「うたぐろうこいつぎトいひぐら
時居ハ　けゝ　顎をこれあげ　義「ヂやいろの間ふろいく鄙ぐ
出来ると久　清「ちうこてある殼きの絵ざねく　義「左程ョ山程
ゑ絵ハ英泉ハ踊ふどゑ　島ぐいくうちまと島の猪
絵ヲ　けゝハ遠川く奥ゆうしいヲや文真ヲ　ゆうる
姉〜さがうき澄ようえん今買よう
ひく　うゑ　川を　こうこうそめはく

清「ねぐつ姉〜　ちゑるおでぐこうるまこ　義「五宿の二階
ゆうてゆいく来ひとりく　ぐトのくれ第　陸奥の二階うて
ゆぐつるる変延寿と業尺弟の　重ねを覚しくいやみの
うき新唄

○トツンテンレンく「ひこみやゑん法華寺へまくよ
だいぐる高雄てるおびるひぐ紅葉ね
清「ヲヤ宮ハゆいまるとしてうき乳ぐねく　義「ちうこ　鎌ハ
間彼ぐ肝ぐだうこうこをどぐ一の　潤ゆぐ中ま拍ゆ

ゑら延寿がさうでゆづの頼を十ばかりとも陸でトンチリ

トンの新文句

「潤田の美櫻なれ新島四方の青田祝みのぐるまく

○朱九位茶の名ふめでくのろけだるみ〜をうるる美茶

寿ろう本母寿人酒ぐすぎたろ五島ゆ〜とろぶ五人

いさてらびゆつくとのふを四方よ

「其角八十四で筆祝かるこ

清〜ブヤあまスケーっ延寿賀とりゆ師匠さんのけらさ喰ぶ

ヨ 友〜そ左根ごろふ山岡友遠ぶ壬所の娘女ゆ〜くゆ

ゆくさらき延寿友とのふ名新の児女がゆれを喰のくろけ

「雪ふ福妻そのえ和も高きうとゆくるるの大門全ふ

まびゆつく筆ふ祝ごろふよ思れ藪うぶのびるろの

全盛ふ彼とそ和ふ白屋の茶ふうり富士見鉄彼の名

ゆ〜ゆ〜ゆるるの名ふ山茶の

「イヨ和江戸の花ごゆ遠ふらび

友〜ゆの彼名ふ屋をびすとふこごつけく寿理ゆ文句

ホ娘ふのゞあるぜヨヤうんゞまゝこ寝るのゝらけづゝるのサア起き
起ゝ　清「あまゝこ湯ホ労是ゝさゝうお〜休しておくん
ゝまゝこいヨ　義「イヤくおらア寝るのハ嫌てゞくトのあけしも湯の
座〜きゝくホゝくゝ品物を買ゝくゝ居る紙あの娘女勘吉を義
の姿を閑ゝく　勘「義さんお清さんをあゝまりおのゞらゝあるさ
いまゝるヨ　義「ヨヤ勘吉大人ゝト笑ひゝゞゝ障紙をゞらゝを
あけ　義「おゝ人だゝうゝ　勘「ハイゝくゝんちゝゞれゝト完示　義「イン
ヨヤゝひちゝゞゝれゝゞゝゝあゝゝ

此一回ハ旅者風雲月

第十二回　緑日のゝゞでゝと

待宵ホ更ゝ鐘の姿ゝきけばあゝね別是の島ハゝめゝゝ
ゝく戀情の涙をつくせ〜古ゝるゝゞゝゝその待宵も
涙ゝもゝとゞかゝゝく愛ゝの神をゝるゝゝゝゝけれ
ゝゝホゝの至ゝゝゝねゞも待宵ゝゝで待合ゝ料理ゝゝ
ゞ吐ゝ春ゝゝゝゝまゞ會席の二階座〜ゝ今ゝゝくと
ゞゝゝも酒ゞゝ酒ゞゝゝゝゝかゝゝゝ風俗男三人娘女
二人已ニ三和ゝゝの猩のゝゝゝ男　ゝ〜ゝゝゞ彼三ゝゝゝと

のゝのゝ　勘「アヽ　はゝサモシトあゞ　徳さんも　面さんもうれし
ゞゝく　芸門ゝく　おゝ　三ヨトのゝバ三　喜八　完あゝ七　三「どゝゞ
お願ゝヤまゝ　徳「　仮　あゝ　ゝゝ　ゝゝとかゝくゞけゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　

ふさふさしアノウ御下　後「いっさく　お稽古　金時
こぶろうろうふのう遠ぶ義和くのろけさせこぶろうん
のごアる　動「そまじろてもあ毎時のいどるお稽と遠りて
居るものヲ　後「アハハハ　此奴ひぐうん毎時のいどるお稽
お使所のいどるお稽　笛「ラットハハこぶんく　ふろ義
ものお舟人ふゆぐッて　ちょトキニちを酒をたぐこせれ人ち
ノウ　已「おお人遠ア　ちんねるろく毎あみるかう　此方ちア
モウずろ美女のを相ものく先刻ろうたぐこせきろく

居るのごアた三吉さん　三「お吉ア先刻ろう元人のおこの
とちぶ伝ぶろうろうろうのけ遠ども　おもしろんうう　ちんふろて
おまっ　ヨ　動「三吉さんサア　おく　春ふぶやアれ人ろの　三「ハく
おあのごろるサアおまえ人の　所人と遠ろ人ト　大きろろろろろろろろろろ
ハハで　動「ろくずりとろうぶト　ハハハを　ろ
の　天ぶ　お節　鄙ものを　たぐこ
きく　鄙稽ふ　座しもの人　遠ハ　ろうぶ
切物でドレ一盃　いっぐろハ三吉さんどろぐ　お願ひト　側ろ

巳太郎の
ゆくへを
三吉
茂平の
在所を
たづる

あつまり湯呑屋敷をいでゝ　己「ハヽヽヽ　あゝアまたこゝにお沢どんが
ぢろ〳〵とゐる〳〵　遠入りさうな湯のやうな思ひつきら
れるぢやあるまいぞ　ごあいさつぬかれてうち　徳「お沢どん
の酒ぬきこゝろのの　甲「それでもまアあれあれ　お沢どんの酒も
見さうな氣づかぢ　丁「アハヽヽヽ　大ぶと幕ぢく居るまるぢ
ろ〳〵と思ひつく今樹うち　源「ひつくおえさん方が来くおそ
うまうと藤ぢさうな　丑「ぬまとのぢの酒ぢで美味ものが
来るまうな　勘「ひまうまぢが来うう待ねナ　ドレあゝ

湯呑屋さまゝ　ア「イそうきまこと湯呑屋のぢゝ　己「まつぢ
ものを呑で藤ぢも発ゝく　捨ばのと思ひつくモウ　ア「
だぜ　勘「ヤモ真ぢ平と主ゝきの酒ふノウ三ぢ　三「アそ
ちつよ家内でも行ぢ　お主ぢ時ぢ　おゆぢうぢのぢと
まぢ　ア「ハヽヽヽ　お見ぢ　お沢どんサア
ちつよと湯呑みいぢを　「アイつぢのつ子そう泡のた
ぬ人やうぬサ　勘「アくよ口ョトぢウ引と干ゝ　勘「お沢どん
ぢつぢ　「エ私ら子宝一盃出ぢ　安川でもいつ稼人ちゝ今春

あのこの秋番ごろこのようなもの稲ひとくるるとまるる
ぎょうそうぎごのみたるく来れべのくイヤ来ろうはんぶん
よこしくちんきょ用ごあるうう沙のくトあいさるも芸
ふさうくと出ろ沙　「アハハハハ　ハハハハハ　あるはだアさんご　「ごのも
いっとくでいく　「あるまごぐんきゆふ実ごあるぐらの金稲ま
切者ごョ　「左稲ごろふョあくいの持ゆ人ゆの実のある
めご　「三者さんちとさるね人うあゆふどふも実ゑ
らるぜ　「ヨやくく稲ふちゆアまとふくく実ごゆまる沢
ハ　「あるの稲ごふも晴人ふるりくく見ね人けアゆア
るるね人　「まるくこごつけるョ　「そだゆて展ね
る　「ヨやるのことる人稲まゆア晴人のことごやアるのるね人
たぐ実のあることサ　「こご実のあることふひごりふのふ
「まア稲　「ク　「あの稲内の姉さんや新ちさんの
ことるるぶたちんどんることでも芸房でもるんでも同ふ
あくちるまア　「くごんきゆでも実ゑつくく　まるハト
ひるごるも稲の内ふ義年のことを思ひいごくくるさぐ

[illegible]

三ヽヤ 勅 ヤ 此ノ方ノ人の情人とるべう

[illegible]ん 私ハ情人ハ多のもあるまいものヲ 勅 てアサ

[illegible]ばサ 三ヽて [illegible] 則左様にも [illegible]

[illegible]ハてア [illegible] 見る [illegible] 是れるの人ニ

法ヽて [illegible] 情人ハ [illegible] 見ちゃ [illegible]

三ヽなるほど 法 [illegible] 八ヽおのらと 三ヽヨヤ 二八ヽ 去 [illegible]

法ヽおのゝの方が [illegible] 笛ヽヘン 自 [illegible] 法ヽヨヤト

笛の [illegible] [illegible] 真似をする 三ヽヨヤ [illegible]

[illegible] 法ヽ左様ヨヽ [illegible] 何所ヲ退

なくして [illegible] 笛ヽいやでもあの人退 [illegible] 癖ハあるら

[illegible] 法ヽて [illegible] 三ヽまたハノ [illegible] の

[illegible] 已ヽ [illegible] 勅 ヤ

[illegible] 法ヽ [illegible] 居るの

のの 笛ヽ [illegible] 三 [illegible] 勅 ヤ

[illegible] 已ヽ [illegible] の [illegible]

[illegible] 法ヽて 猛 [illegible] 名

傾をするゼ　動「ハヽヽヽ左様じやアるひがみたんとふの宅の
まるがみト　ゆ指を出し〳〵く見廷　動「こまでごろうきらくして
居るんす　三「ゆふ　肥満るさ〳〵きく出るとだん〳〵つらひ
出し〳〵こまるあるうう　動きぽんよく閑く　動「みあく
あるとゆふくきらく　動「ちあくまでごけれど私ハ
まこけ形なおざ〳〵きく出るのうちらひこまも
骨のおきるこまるのう〳〵楽ぶく宅ふよん圭おもしろい
こをだらうとあるあヲ　私ハ形いみあざ〳〵きだろう　と極く
きまこんハ　動「ヲふヽヽヽあんなこまを言うく居るのごものヲ
祝ねえ出とあるヨヲ　徳さんどふ〳〵このごをもつたろうくと
おるまが意〳〵くるんこのごふ　已「今うるまが来るうば菓
ごけ　溺をやらうく出ふ性ねえナあへ留さん　動「ちまの徳
さん留さん　撫ふするるのが今和ア　送ろくいろねえうう舞
さんあるおるハさんやもようろ〳〵くやとおこまアと今和アどあご
撫出〳〵したおこんなせえとおこてやるれヨ　已「ナゼ今和ア　動「チツト
今和ア　徳「いくようくちんとまるごくこのこまねえ　動「ハ

くらしょ　あ「ヲヤいやごじょ左右じゃやアね人やアま　笛「トゥーゆくゆくゆく
ゆめ人もいくとけをするのうきゆめ三きぶん　三「きんぐろ新イあやア
きまきんショトいのわりうりやよりしく女中の変あるな
ちやくショトいのひうぐう産しきん人夢り　幸「バイうるぎうぐまのうま
ちくショ已「ヲットくくまくく　勅「ヲイサア元人を俗でん
極ナ　お沢どんもお梅きんもそしてあの人も来るヨ　独「ヲくく
さあも極人中ちやくやちうくやちけよふ　笛「ドレ三味を弦
ぐちくはるもまけぐれ　独「宿人ちやくきのぐきあらの

三「きんぐろ紙細れよりぐこれ人　独笛「アハハハきまきれの踊ひ
興安元ぐあるうめろ　三「えまでも行ぐろきふ淋しくきりまた
ヨトきまくく時しも
暮れの種ボンくちるふ波ある新会の変　新会
ぬ新ろトこ暮きまぐバ知れどもひと淋しき
変ちやく
「七ちヤア八ショウ　みぐヨ十ヲ引ヨウ　新を投る青　ホンく
それ行ものゆも裏の裏ある中ふりけて極ふの新会死

立男ハ小ぶろの半十を陰ぶし七陰くさうる草の新芽のごとき
美婦人の裸体堀の一重部屋ハさもだこうる図金屏風の図
ゆる顔ハさらふ心をのちゆる婦ハ色玉婦ハ色玉ゆる楽ハ盛衰
婦婦ゆるゆるむべく赤楽むべき浮世ゆるべや

以上ゆる月二編みいうるて八三吉茂平の再会ふおもしろ
寄せ張入情の手ことを書しゆる看官ふ涙のこぼるゆるら
ゆる婦女ふ貞操をゆる身一の教訓ゆるて

茂平花名所懐中暦三編下之巻終